

全科協ニュース

1974年11月1日発行
(通巻第20号)

全国科学博物館協議会

東京都台東区上野公園
国立科学博物館内

〒110

TEL.822-0111 (大代)

おもな内容 ◇無関心へのアプローチ 科学技術館 山田英徳 ◇博物館も進化する 国立科学博物館 鶴田総一郎 ◇全科協北から南から 宮崎大学農学部付属 農業博物館 広江一正 ◇会員館園の紹介 博物館明治村

無 関 心 へ の ア プ ロ ー チ

科学技術館 山 田 英 徳

まえがき

田中総理の金脈問題をとりあげた文芸春秋11月号を買って金もうけの術を学ぼうとした男がいた。本屋へ行ったらすべて売り切れ。

さてどうしたものか、と考えた末思いついたのが自分の町の図書館。しかし行ったこともなければ見たこともない、まったく無縁だった図書館という施設。よくぞ気付いてくれたものである。

この記事のある新聞で読んで我々博物館施設におけるこれらの活動に1つの暗示を受けたのは私1人ではなからうと思う。

博物館における各種の教育活動は近年特に活発に展開されるようになり、種々の形態と内容、独特のアイデアを駆使して次第に参加率を高めつつあるようである。しかし、この参加する、あるいは博物館そのものを利用する人々をみると、その活動の内容や施設に関心を持っている人が圧倒的に多いことは明らかである。これはある面で当然のことであり、だから運営もやりやすく、処理もしやすいことになる。しかし、社会には、まったく博物館という施設やその活動に無関心な層も決して少なくないことも云えるのである。そして、我々博物館人は、残念ながら、その無関心層に対する積極的な働きかけは、なかなか出来ないでいるのが現状である。我々はこれからの博物館活動において、関心層のレベルを高め、より一層定着させると同時に、無関心層への積極的なアプローチを試みることも重要な活動になってゆくのではなからうか。その意味で、すでに1961年に『地域社会発展のための文化センターとしての博物館の役割』に関する国立科学博物館の岡田、鶴田両氏による研究から10数年を経た今日、どのような変化がみられるかについて関心を寄せているのは私1人だけではなからう。



ホームサイエンスサロン風景

アメリカの科学博物館

今年の5月、機会があって米国の科学博物館のいくつかを見学した私は、その運営や活動に対する柔軟な発想と積極性に少なからずおどろいた。科学博物館だから科学以外の事はとりあげない、という発想はほとんどなくなりつつある、というのである。調べてみるとよくもまあ、こんな事まで、と思われるような活動を事実行っているのである。

たとえば、毎月1回あるいは年数回の音楽会といったものは、かなりの科学博物館で主催されている。親子対象の人形劇も多いようである。このほか、読書会、芸術や経済に関する講演会といった類のものもある。

こうした催事について、館の責任者たちはほぼ一樣に、無関心層の発掘と市民への開かれた施設としての印象を高められる、と信じている。もちろん、その機会をとらえて、館のPRを怠ることはない。私は、もちろんアメリカと日本のいろいろな事情の違いから、単純に真似をすればよい、とは思わない。しかし、そこにひそむ柔軟な発想と運営には、目を向けるべきであらう、と思う。

当館における事情

①質問の処理

どこの博物館でも行なっているように当館にも電話や手紙でいろいろな質問がとび込んでくる。先日私は、田舎の中学生から1通の質問を受け取った。

「科学クラブをつくったのはよいが自分が部長にされてしまい、どう運営してよいかわからない、部長の心構えと、どうしたら部員が自分を信頼してくれるか教えてくれ」という悲痛な(?)内容のものである。便箋5枚にもなった返信を彼はどう受けとめた事であろうかわからない。中には、ただハガキに「資料送れ」という質問もある。多忙な時は無視したくなるものである。一番多いのはスジ違いの質問である。理工系の当館に、生物の分類の質問を寄せる。私は、こうした無関係な、あるいはナンセンスと思われる質問にこそ、熱意ある措置を講ずるべきであろう、と考えるがいかがだろうか。

②音楽会

数年前、当館主催で日本の一流演奏家による無料音楽会を数回開催した。内部では賛否両論が渦巻いたことはいうまでもない。否定的意見の多くは「そんなものに金を使うより、やるべきことがもっとあ

る」という趣旨のことである。もっともな意見である。しかし、私はこの催しを決定したトップに拍手を送った1人である。この音楽会で当館活動を知った無関心層の1人がサイエンスクラブに子供を入会させた事実を目を向けたいのである。

③ホームサイエンスサロン

昭和46年から始められた婦人対象のこのサロンは、今年で第5期を迎えた。社会で地道な活動が続けている専門家を中心とする講師陣が好評で安定した活動になってきている。ここでも巾広い層に会員となってもらうため、6ヶ月、12回のテーマを工夫している。例えば、「手品のしくみ」(第1期)「生活の中の美」(第2期)、「環境と音楽」(第5期)などのプログラムも含まれているのである。

おわりに

科学博物館の活動に無関心層の目を向けさせるのはなかなか厄介である。しかし人間の行動と関心をもつキッカケは種々雑多であり、むしろ意外とも思われるキッカケをつかんでいる例が多いのである。新しい支持層を増やす意味で、視点を変えた活動を考えてみたいと考えている昨今である。

博物館も進化する

～Ecomuseum, Dynamuseum, Fragmented Museum, and Mini-Museum～

博物館も、人間の、特に地域社会の“needs”とその環境に応じて進化して行くものらしい。この視点に立ってみると、どうも既成の「建物博物館」や「資料保存庫」などは行きつくところまで行きついてしまって、あとは退化か変質かというようなムードになる。

さて首題の4つの新しい概念の博物館は、いわば新種である。といっても突然変異ではなく、自然選択(人間選択?)の結果の進化であって、皆基づく原点を持っている。何れも第10回のイコムの総会の折に、或いは発表され、或いは強調されたもので、西ヨーロッパの“Museologists”にとっては数年来の主張でもある。以下各新種についてその概要を記載してみよう。

1. Ecomuseum 環境博物館

この構想は、既に1971年のパリー・グルノーブル大会(イコム第9回大会)の折に発表されており、その起源は1962年のオランダのハーグにおける第6回大会の時の決議の一つ“Means available to museums to help in conserving the natural and cultural heritage of mankind against rapid expansion of industrial civilization”にさかのぼり、以後イコムの基幹的事業

国立科学博物館事業部長 鶴田 総一郎

の一つとして継続されてきた結果こうなったという次第である。

第9回大会の決議のあとを受けて、イコムでは「博物館と環境」シンポジウムを1972年9月、フランス環境省とイコムフランス国内委員会の招待の下で、フランスで開催し、そこで得た具体的な方法論の一つが“Ecomuseum”である。発想者は元イコム事務局長のアンリ・リビエール氏。これは環境を扱う専門博物館として、自然環境、文化遺産と文化と自然科学両面での発展との関連を学際(interdisciplinary)的に研究の上、その総合を身近かなものとして表現するのがねらいである。従って対象地域と対象地域社会に直結し、その相互間の働き合い(現象)を正面から取り上げる機能型博物館でもある。詳しい内容はユネスコの“museum”第25巻1・2合併号(Museums and environment 特集)に出ているのでこれに拠られたい。

さて、この考え方は突然生れたものでないことは前書きにも述べたとおりである。既成の概念、つまり“Open Air Museum”, “Trailside Museum”, “Park Museum”, “Site Museum”などと“Cultural

or Natural Monuments”の野外保存型などが、“ひと”と“もの”との等価的にかかわりあいという総合で、新しい概念へ進化したものとみればよくわかる。

提案者があげている Ecomuseum の例（ウエサン環境博物館、マルケース環境博物館など）も、地方自然公園の中の現地保存民俗園から出発している。

ところでこのような思考の展開は、当然日本にだってある筈である。例えば、財団法人21世紀ひょうご創造協会の博物館構想専門委員会では、中国縦貫自動車道の開通に対応して緑の回廊計画を打ち出し、地域の自然と生活環境の全体を生きた施設とし、その活動の成果を社会に還元する“自然環境博物館”を構想しその実現に努力している。前大阪市立自然科学博物館長の筒井嘉隆氏などが中心になって動いているようである。つまり心ある人びとにとっては日本でも既に今日の課題になっているとも言えよう。

2. Dynamuseum 体験博物館

第10回のイコム大会の前に開かれたイコム教育・文化活動国際委員会ではじめて提示されたもので、ブラッセルの王立歴史美術館のデストレー女史と、ロンドンの国立海事博物館のプロクター氏の共同提案である。

両館での実施の成果をもとに、主として青少年を対象に博物館資料そのものと利用者との間の対話を利用者自からの手で引き出させ、過去及び現在の資料から将来への可能性と新たな価値の発見にまで到らせようというのがねらいである。方法としては、利用者自らが、自主的体験的学習と研究を進めるための“workshop”を中心に、“the studio for creative activities”を基本としている。従って提供されている資料類には、最初はいわゆる解説だの既成の知識だのはいっさい付けずに、ものそのものからこれらを各自全く自由に、その人向きに引き出して行くところからはじまる訳である。そして、まず観察し、比較検討し、討議し、そして自からつくりだした意見を発表するというような学習過程を積み重ねている。一回の参加人数も15名以内に限定し、“educator”（教育学芸員）は、これに対して2～3名用意することが望ましいとされている。学校の教育課程とは全く関係なしにプログラムを考えなければならないとしているのも特徴的である。またこのやり方を進めて行くうちに子供同志相互に“go-betweens”（媒介者）になり、ここにくる前にはあったかもしれない社会的、知的、言語的、あるいは身体的障害による差もずっとすくなくすることができ、子供の自主的な創造的社會がつかれるようになるとも言っている。

この考えも決して急に発生したものではなく、例えば20世紀の初頭からアメリカで展開された“Children's

Museum, Junior Museum”の中には早くからこのような方法がとられており、ヘーグにはこのような方法専門の学校教育のための教育博物館が早くからあった。日本でも、北海道開拓記念館には、当時その計画委員の一人であった私などの提案で、日本で最初の上述の内容を持つ体験学習室がつくられ、つづいて埼玉県立博物館に郷土学習室という名称でのこの方式が、さらに昭和48年から国立科学博物館でスタディー・ルーム（Study Room）としてこの考え方が定着してきている。

しかし、今度の提案のように、学校教育と全く切り離し、博物館独自の立場からの“自からの手で創造する”独立の博物館、行動と体験の中から価値を創造する単独博物館の設置が叫ばれたのは初めてのことである。

なお、この提案は何れ、この国際委員会が発行されている Annual Report に詳細がのる筈である。

3. Fragmented Museum 資料群博物館

これは特に今度の大会で提案されたものではないが、最初に述べた Ecomuseum の基本型もしくは、もっと徹底した段階として考えられる独立概念と考えられる。

前イコム事務局長バーリン・ボーハン氏の提案になるもので、彼はル・クルーソー・モンソー・レ・ミン「人と産業博物館」を例にとってこの考え方を説明している。これによれば、上述の2つの地方都市を含む一つの半農・半産業化地域社会に対し、本当の意味でこの地域の人びとに奉仕する博物館を考えた時に、従来のような、建物と収集資料と観光客のためにあるようなものでは役立たないことに注目し、建物が無く、特に集めてきた資料など無く、いわゆる“利用者”も無く、地域の人びとが日常生活の中で使い、生かし、価値の展開をして行くというための資料の確保という博物館を考えたとしている。

要するに民家でいえば、建物と環境と中の資料が一つの全体となって現地に保存され、これが観光客やいわゆる利用者ではなくて町の人のために開放され利用され、将来への手掛りの資料になるように仕組まれる。このような資料が一つの単位になって、人と産業という視点からあらゆる望ましい単位が保存され整備され、その資料群が全体として博物館としての役割を果たすという意味でまとめられているものである。いわゆる博物館という建物は無いとあったが、結構本部に相当するものもあり、文書館も新設されているので、正確には中枢機能部分のある資料群である。しかし、資料は集められているのではなく、本来あるべきところにはじめからある点や、これが町ぐるみの全体のあり方の中に位置づけられ意味づけられていることなど従来の博物館の概念を遙かに越えたものである。

私には或る意味では、ここ数年前から私が主張してき

た地域社会博物館 (Community Museum) の一つの典型的な実例と思えるし、また Ecomuseum の討議の際に出ていた “Neighbourhood Museum” と似た概念だと思う。しかし何れにしても、“Site Museum”, “Monument”, “Nature Reserves” など特定の資料に注目して考えられた従来型に対し、ずばり “Community” を対象にして考えられたこの概念はやはり新しく、注目すべきものであると思う。

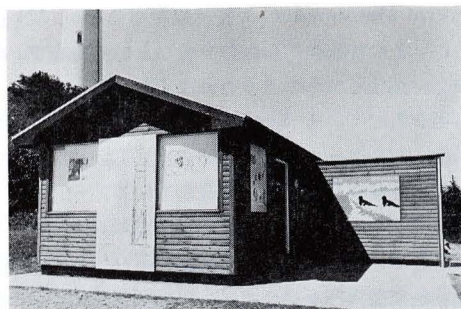
なおこれについてはユネスコの museum 35巻第4号にバーリン・ポーハン氏の詳しい記事があることをお知らせする。

4. Mini-Museum ミニ博物館

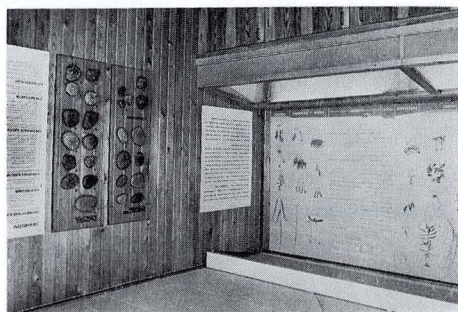
これも今回の自然史博物館国際委員会の第2日目にデンマークのオールフス自然史博物館の教育学芸員であるニーナ・レーフェルト嬢が発表したもので、正式な議題は「ジュトランド地方における輸送可能な自然史博物館の特殊な種類について」ということで、発表をきくまでは内容の予想がつかなかったものである。ミニ博物館というのはどうも最初からあった呼名ではないらしく、これを実施しているうちに、いつの間にかついたニックネームみたいなものらしい。結局これが一番皆にわかりやすいというので決定した名称ということであった。

オールフス自然史博物館はジュトランド地方の唯一の正統派自然史博物館で、オールフスの市だけでなくこの半島地域の自然の保護と自然教育も担当している。これがミニ博物館発生の基因である。さて、毎年夏になるとヨーロッパ大陸、特に西ドイツあたりから避暑を兼ねた観光客がどっと押しよせ、なかでも西海岸のリングケーピング溺谷を細長く南北からかこむ半島地域は毎年たいへんな賑わいだとのこと。自然発生的にこの地域の自然保護の実務と、それに関連する自然教育が必要になり、特にママと子供連れなどが海水浴のかたわら拾い集める貝だの海藻だのは、地域住民にとっては毎年やっかいな同じ質問の繰り返しになる。こんなことから、同博物館で数年前から、漁民の漁具置場を借りての臨時出張所がつくられた。これも場所柄不便なことから、ブレハブの15坪程の移動可能なミニ博物館をつくる次第となったという訳である。中味は誰でも考えつくような現地での質問や名前しらべに向く第一次ソーテング用の資料と展示が教育学芸員とともに用意されているという程度である。しかし砂浜に一つ、或いは小高い丘の上の一つ、他にも必要に応じて移動できるようにトレーラーのフレームの上につくことを考えたりなど楽しく展開して行っている。夏3か月足らずで10万人近くの人がこのミニ博物館を訪れるとか。想像しただけでも楽しい。

この考え方も、20世紀に入ってから、“Trailside



ミニ博物館の外観



その内部

Museum”, “Wayside Museum”, “Trailside Exhibit”, 或いは “Mobile Exhibition”, “Travelling Exhibition” などがあり基本的な着想は別にとり立てて言うほど新しいものでもない。しかし夏の短い北欧の、その夏の楽しみを倍加させながら、自然を知り、ひいてはこれを保護するところへまでの働きかけを果し、かつ不必要な時には、オールフスその他の都会地での役割をまた果すような “Mini-Museum” までの発想はやはり無かったといえよう。もっとも、日本にもかつては日博協の機関誌にこの種の考え方が紹介されたこともあるので、この意味からも突然変異ではない。ただこうやって実例として、それも20代の若いお嬢さん（担当責任者）から楽しそうに国際会議で発表されると、やはり、やられたなと思う。それにつけても、もし日本でこれをやろうとすると、やれ自然公園法だの、海水浴場規制の厚生省何とか法規だの、教育委員会所管じゃ無いとかのややこしい縦割り行政にひっかって、こんなにすかっとやれるだろうかと思う。

以上、めばしい新博物館の話題を、私が関係した部門から拾って紹介した。以上はほんの一例にすぎないが、この国際会議は、まさに “Market of Idea” であり、それぞれの専門の分野の人びとが、専門的な触角をのばせば、それぞれすばらしいまた新しい収穫がある筈である。手分けして、いいものはどしどし日本の博物館のために吸収してこようじゃありませんか。

全 科 協 北 か ら 南 か ら

宮崎大学農学部附属農業博物館

—その移りかわりと現状—

広 江 一 正

全国科学博物館協議会の会員58館の中で、学校付属のものは次の4つである。すなわち、秋田大学鉱山学部附属鉱業博物館、岩手県立広田水産高校付属水産博物館、東京農工大学付属繊維博物館と宮崎大学農学部附属農業博物館である。協議会に入会していないものもいくつかあるかも知れないが、それにしても意外と少ないなという感じがする。特に地方の大学の公開の科学博物館は、それを通して地域社会の産業の発展に貢献できるということからしても、もっと沢山あってよいのではなからうか。

宮崎大学農学部はその前身の宮崎高等農林学校が大正14年に設立されてから、今年で丁度50年を迎え、11月には創立50周年の記念式典が行なわれる。農学部附属農業博物館は、昭和10年に宮崎高等農林学校創立10周年記念事業として、当時の卒業生と教職員の寄付金によって設立された。したがって、今年で40年を経たことになる。しかし、その時の建物は残念なことに、昭和24年6月の台風で破壊されて使用不能になってしまったので、やむなく休館の事態となった。その後、当時の学長、農学部長および中島茂館長の努力により、昭和25年6月に復興開館式を挙げたのが、現在の建物である。この新館の建築費は官費から支出された。総面積は406.5㎡、展示室231.4㎡、資料室など85.9㎡、その他89.2㎡である。事業としては、昭和20年に農事相談部が併置され、各講座の教官がそれぞれの研究範囲に属する農事の一般相談に応じている。

展示品の中で、特に地域と関係の深いものをひろってみると、宮崎県産の特殊植物と亜熱帯産果実の種子、飢肥（おび）杉の研究、宮崎県産樹木の材鑑、農具の変遷、宮崎県の特動物などがある。飢肥杉の研究は、かつて木造船用材としてその名声をうたわれた飢肥杉のすぐれた生長状況を、樹幹析解の方法によって明らかにしたものである。展示資料としては、58年生、胸高直径64cm、樹高28.8mおよび41年生、胸高直径52cm、樹高24.3mの2本の樹幹析解用円盤がある（熊本営林局寄贈）。

なお、比較研究のため、64年生、胸高直径52cm、樹高27.7mの秋田杉円盤が展示されている（秋田営林局寄贈）。飢肥杉の特徴は生長の早いことで、同じ胸高直径のもので、秋田杉が60年以上を要して達する太さに、飢肥杉は20年も短かい40年で達することである。飢肥杉は高温多雨の土地、特に盛夏の候にも比較的雨量の多い所を好むので、宮崎県南部地方はまさにその生育に適した気候条件を備えている。かつて現在の日南市飢肥に居城を構えていた飢肥藩（伊東家）は、藩の産業として飢肥杉の栽培を大いに奨励し、切り倒された材木は日南海岸の油津港から日本各地に搬出されたのである。なお、飢肥杉といえば、その姿勢の美しいことも忘れることができない。一本一本の姿もさることながら、遠くから眺める飢肥杉の見事な景色は、宮崎の観光に役かっているにちがいない。しかし、最近時は世のせいもあり、飢肥杉の栽培も次第に減少しつつある。

農業博物館の建物も新築以来25年を経て、破損箇所も目立つようになってきた。展示品も次第に数を増して陳列しきれなくなってきた。ただ観覧者数は年間1,000名から1,500名くらいでほとんど増減はない。宮崎大学は、ばらばらに点在している学部を集めて、新しい土地に統合移転する計画が進められている。その移転を契機にして、農学部将来の発展を期した新体制作りの計画が練られている。農業博物館設立当時は僅かに3学科にすぎなかった農学部も、現在では8学科にふくれ上っている。大学の統合移転が実現し、農学部の新体制が発足するとき、農業博物館も内外ともに装いを新たにして再出発したいものである。

農業博物館としては、その特徴を生かして、資料の保存、研究および教育を介して、日本農業の体質改善に寄与すべきである。宮崎のおかれた西南暖地という環境にそくした、農林蓄水産業に関する研究理論に基づく技術の革新および指導によって、地域農業の発展に役立ちたいと願っているものである。

(宮崎大学農学部附属農業博物館 館長)

会 員 館 園 の 紹 介

財団法人 博物館 明治村

所在地 愛知県犬山市内山1番地

☎484 電話 (0568) 67-0314

(東京事務所) 電話 (03) 263-5566

道 順 国鉄 名古屋駅南 名鉄バスセンターから直
通特急バスで63分

名鉄 小牧線 明治村口駅からバスで10分

設置者 財団法人 明治村

理事長 渋谷秀雄

館 長 谷口吉郎

開 館 昭和40年3月18日

休 館 日 年中無休

開館時間 夏期: 10時~17時 (3月1日~10月31日)

休期: 10時~16時 (11月1日~2月末日)

入 館 料 大人 500円 中学・小学生 200円

団体割引 (25名以上)

大人 400円 大学・高校生 300円

中学・小学生 160円

展示資料 1. 明治建築 (一部大正も含む) 40棟

うち 重要文化財 8棟

県有形文化財 1棟

2. 建築資料 2,000点

2. 歴史・民俗資料, 科学技術資料

その他 10,000点

その他の展示

1. 村内機械館で, 明治時代の原動機械, 工作機械, 繊維機械等を動態展示

2. 蒸気機関車 運転中

SL12号 英国シャープスチュアート社
製明治7年新橋~横浜間を運
転

SL9号 明治45年米国ボールドウィン
社製

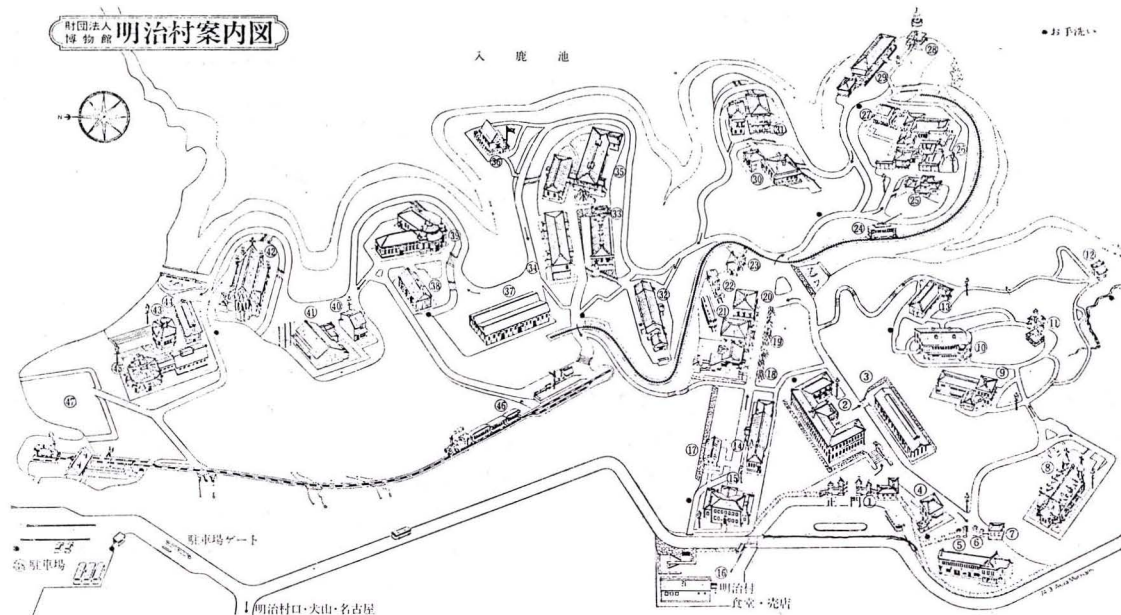
ハフ11号, 13号, 14号 (三等客車)

明治40年代 国産

定期刊行物

明治村通信 (ニュース, 月刊)

財団法人 博物館 明治村案内図



- ① 第八高等学校正門
- ② 三重県庁舎<重要文化財>
- ③ 鉄道局新橋工場と明治天皇・皇后御料車<鉄道記念物>
- ④ 大井肉店
- ⑤ 三重県尋常師範学校 (蔵持小学校)
- ⑥ 三重県庁正門
- ⑦ 名古屋衛戍病院巡視室
- ⑧ 聖ヨハネ教会堂<重

要文化財>

- ⑨ 学習院長官舎
- ⑩ 西郷従道邸<重要文化財>
- ⑪ 二重橋飾電燈
- ⑫ 東京盲学校車寄
- ⑬ 鷗外・漱石旧宅
- ⑭ 第四高等学校特別教室
- ⑮ 東山梨郡役所<重要文化財>
- ⑯ 食堂・売店
- ⑰ 木曾・清水医院

- ⑱ 東松家住宅<重要文化財>
- ⑲ 安田銀行会津支店
- ⑳ 札幌電話交換局<重要文化財>
- ㉑ 蒸気自動車<鉄道記念物>
- ㉒ 尾西鉄道蒸気機関車1号
- ㉓ 京都七条巡査派出所
- ㉔ 京都市電
- ㉕ 幸田露伴宅・蝸牛庵
- ㉖ 坐漁荘

- ㉗ 赤楽庵
- ㉘ 品川燈台<重要文化財>
- ㉙ 官島燈台付属官舎<重要文化財>
- ㉚ 長崎阿蘭陀屋敷二十五番館
- ㉛ 神戸山手・西洋館
- ㉜ 第四高等学校無声堂 (武術道場)
- ㉝ 日本赤十字社中央病院病棟
- ㉞ 歩兵第六聯隊兵舎

- ㉟ 名古屋衛戍病院<愛知県有形文化財>
- ㊱ ハワイ移民記念館
- ㊲ 鉄道寮新橋工場 (機械館)
- ㊳ 工部省品川硝子製造所
- ㊴ 伊勢・山田郵便局
- ㊵ 小泉八雲焼津の家 (山口家住宅)
- ㊶ 呉服座
- ㊷ 京都・聖サビエル天主堂

- ㊸ 東京駅警備巡査派出所
- ㊹ 前橋監獄雑居房
- ㊺ 金沢監獄中央看守所および監房
- ㊻ 蒸気機関車12号 客車 (3等車)
- ㊼ 帝国ホテル建設予定地
- ㊽ 駐車場